東国後期古墳分析の一視点

― 鉄鏃から見た千葉市生実・椎名崎古墳群 ―

白　井　久美子

目　　次

Ⅰ．はじめに……187

Ⅱ．生実・椎名崎古墳群の概要……188

Ⅲ．鉄鏃の検討……192

1．分類と系統の抽出……192

2．主な鉄鏃の抽出と検討……192

3．鉄鏃の組み合わせと変遷……197

4．小支群内の組み合わせと変遷……202

5．伴出遺物の検討……207

Ⅳ．生実・椎名崎古墳群分析の展望と課題……208

Ⅰ．はじめに

東国の古墳時代後期社会の変質を最も端的に具現化しているものは、各地における群小古墳の形成とその特性である。

古墳時代後期の群小古墳で、武器、武具を主体的にもつ場合、その組み合わせは当時の階層性と普遍性を追求することに有効であり、鉄鏃は、特に飾り大刀をもたない階層の分析に有効であると考える。最近は、東国の古墳時代鉄鏃の分析が各地で行われているが、(註1)総論的な分析が多く、一定地域内の基礎的な分析は見られない。土器が集落ごとの分析を経て、小地域内、さらに一定地域内で比較検討されているように、使用頻度の高い鉄鏃の分析はまず古墳群ごとになされる必要があり、さらに他地域との同レベルの比較・検討を通して歴史の中により正確に位置づけられるものと考える。

千葉市生実・椎名崎古墳群は、後期に至ってそれまでにない隆盛を見せる古墳群の一例であり、近年の発掘調査によって南北約20km、東西約25kmの範囲で160基の古墳が調査され、このうち、後期・終末期古墳(註2)と判断できるものが約8割を占め、135基にのぼる（第1表)。一地域内の調査例としては、最もまとまったものの一つといえよう。

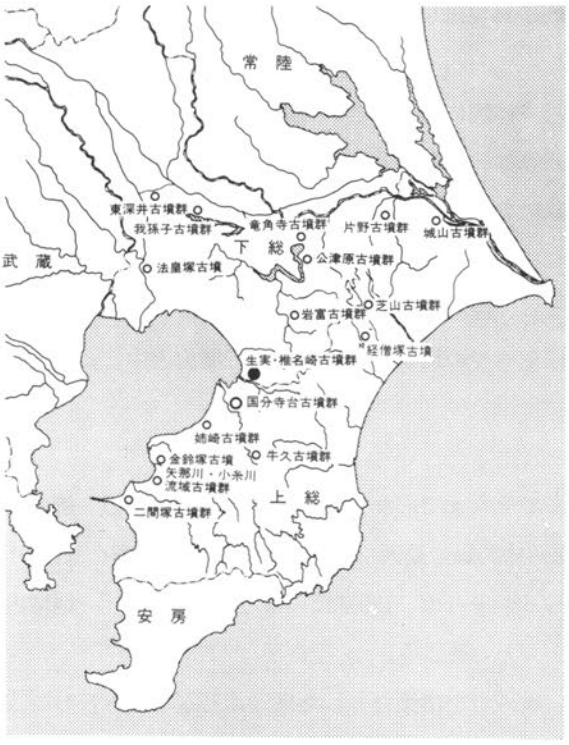
この後期古墳群の最も特徴的な地域色は、軟砂岩を構築材とした横穴式石室と組み合わせ式石棺を採用している点で、短期間の石材の崩壊によって埋葬施設の遺存が悪い反面、盗掘をまぬがれた例が少なくない。また、同一墳丘内に複数の石室・石棺をもつ例が多いことから、追葬による年代幅をさほど重視しないで済む点で、直葬古墳に比すべき稀有の例といえる。

副葬品では、鉄製武器、武具の出土率が高く、埋葬施設の検出された古墳の83%で出土している。中でも鉄鏃は、約70%の古墳で検出され、総数は1,300本を超える(第3表)。また、各々の古墳によって組み合わせ、種類に変化があり、支群ごとの変遷が追えることから、この古墳群の分析には、最も出土頻度の高い鉄鏃を使用した基礎的分析がかなり有効であると思われる。

分析に際しては一括性を重視し、小支群ごとに把握することによって、主体的な鉄鏃の組み合わせと変遷を検討し、特性を抽出することとしたい。(註3)

なお、時期の確定には、鉄鏃のみではなく、伴出土器や石室構造の変化をも加味していることは、改めて記すまでもない。

II. 生実・椎名崎古墳群の概要



第1図　生実・椎名崎古墳群と房総の主な後期古墳

生実・椎名崎古墳群は、東京湾東岸にそそぐ村田川下流域の台地上に形成された古墳群で、樹枝状に開析された小支谷に面したおよそ20の小支群から成る総数200基以上の古墳群である（第1・2図）。

村田川北岸の沖積地から、大きく4本の谷（沢）が開析されており、最も南の谷（D）が、旧千葉郡と市原郡の境界として下総国と上総国を分けていたと推定され、現在もこの谷が千葉市と市原市の境界となっている。

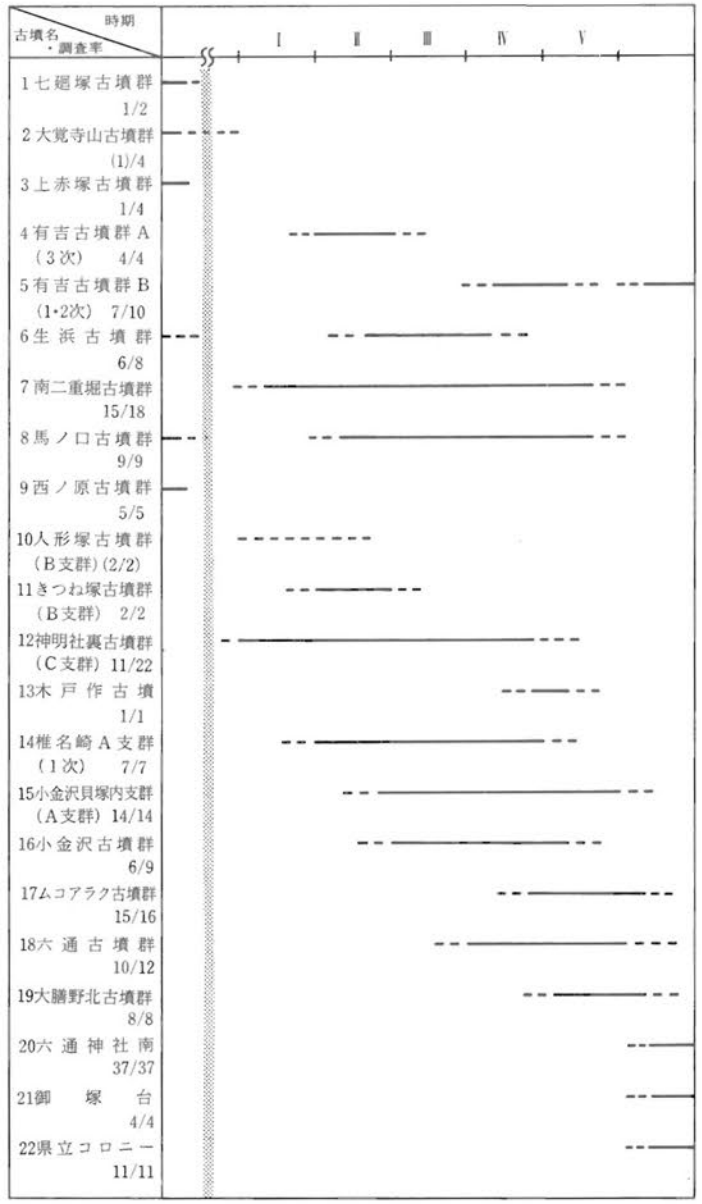
後期古墳群は、谷口北側の台地先端部とA谷を中心に形成された群、B谷とC谷に囲まれた中央部に形成された群、D谷と村田川低地に縁どられた台地上に営まれた群の3群に分けられる。各々の谷口の代表的な地名から、生実・椎名崎古墳群、草刈古墳群と呼称することにしたい（第2図）[註4]。このうち、小文では、後期古墳群の調査成果が整理・報告されている生実・椎名崎古墳群を取り上げている。

この地域の古墳出現期から中期にかけての集落と墓域の構成には未解明の部分が多い。出現期・前期段階のものは、南二重堀・馬ノ口遺跡などごく一部で検出されているのみで、弥生時代から古墳時代前期の遺跡が極めて少ない地域としての特異性が指摘できる。前期・中期の大型古墳は、最も北側の谷口に3基〔大覚寺山古墳（墳丘長約62m）、七廻塚古墳（径54m）、上赤塚1号墳（径31m）〕が集中し、村田川流域北岸の最有力者層としての姿を突如示す。前後の時期のその基盤となる部分で謎が多く、各谷口部の突端には、唯一調査例である西ノ原古墳群など前期古墳が存在する可能性があるが、谷口部の大半が未調査のため、推測に留まる部分が多い。いずれにしても、古墳時代中期段階までは、谷奥部の開発のほとんどなされていない地域に、6世紀段階になって大集落と古墳群が展開することが調査によって明らかになっており、さらに奈良・平安時代まで存続する。

以下に、調査例を主体とした概要を示すことにしたい。

註 上図は、昭和49年度の報告（文献14）を基に、その後の調査、筆者の踏査等による成果を補訂し、昭和61年1月に作成した。白ぬきは未調査古墳，黒は調査古墳，破線は消滅した古墳。1は昭和33年千葉市教育委員会による緊急調査，2は昭和44年明治大学考古学研究室・加曽利貝塚博物館による測量調査が行われた。3～22は㈶千葉県都市公社・当センター調査古墳。

第2図 生実・椎名崎古墳群分布図（1：20,000）



第1表 生実・椎名崎古墳群一覧 （調査率：調査数/確認数）

前期	中期	後期	終末期	不明
6 (4)	4 (3)	86 (54)	49 (30)	15 (9)

第2表 時期別の比率 註 数字は調査古墳数，（ ）は%

出現期から前期の古墳は、いずれも一辺８ｍ～18ｍクラスの方墳で、一隅を掘り残した形態と、溝の全周するものがあり、周溝内土坑から管玉が出土した他は、主たる埋葬施設の検出がなく、性格も判然としないが、集落と同じ台地上に築かれている点を特徴とする。

前期新段階から中期の古墳は、滑石製品を主体的にもつ大型円墳によって特色づけられるが、石枕、立花、石製・鉄製模造品の組み合わせは、都川水系の千葉市石神２号墳と共通し、より広範囲な結びつきを推測させる。

群の主体を成す後期古墳群は、大きく２又に分かれるＢ谷とＣ谷に形成された中央部の台地上を中心に展開する。６世紀後半代の群形成期から７世紀中葉の截石積横穴式石室築造の終焉までを後期古墳の時代とするならば、約100年間に86～90基以上の古墳が築かれた群として捉えられる。

支谷中央部を占める椎名崎古墳群の３支群（第２図―10・11を含むＢ支群、12を含むＣ支群、14・15から成るＡ支群）は、50ｍ～30ｍクラスの前方後円墳を中核とする支群で、群ごとに一定の面積を占めて広く群在する。

前方後円墳では、この地域で唯一埴輪をもつ全長約50ｍの人形塚古墳（第２図―10）が注目され、現在発掘調査中であるが、後期の椎名崎古墳群の出発点と考えられる重要な古墳である。群形成初期には、直葬系の古墳（第２図―11・12）が築かれ、軟砂岩使用の石棺・石室系の古墳が定着し、普遍的になるのは、群の拡大する段階で、台地基部からさらに奥部へ築かれた７～10基単位の５群（14・15・16・17・18）は、群形成の盛期の支群である。

一方、Ａ谷に面した後期古墳群は、谷の奥へ広がっており、谷口近くに直葬系の２群（４・５）が築かれ、石室を主な埋葬施設とするより新しい群は谷奥部へと築かれていく。

また、17のムコアラク支群形成の段階で、方墳の導入という新たな展開を示し、この方墳の導入によって生実・椎名崎古墳群も終末期を迎えることになるが、方墳の採用時期については、現在のところ資料が不十分なため、時期を限定することができないが、７世紀中頃には出現している。

また方墳の築造は、いわゆる終末期の古墳として終息することなく、奈良・平安時代まで存続してさらに新たな展開を示しており（第２図20～22）、この地域的な特殊性は、後期古墳の時代にさかのぼる造墓活動の延長上に派生したことが推測される。

今回分析の対象とする、調査された86基の後期古墳のうち埋葬施設の検出されたものは70基であるが、複数の埋葬施設をもつ古墳があるため、埋葬施設の総数は103基となる。前述したように、83％の古墳に武器・武具の出土が見られ、78％の埋葬施設に何らかの武器・武具が出土した状況にあり、土器の出土が少ないのとは対称的である。主なものには、直刀、鉄鏃、刀子、馬具、鉄製弓飾り金具が挙げられ、この他に小札、鑷子、石突（鉾）が少数出土している。70

基の古墳に見る出土率は、直刀54.0%、鉄鏃68.5%、刀子54.3%、馬具2.9%、飾り弓8.6%で、103基の埋葬施設では、直刀48.0%、鉄鏃63.0%、刀子47.6%、馬具2.0%、飾り弓5.8%である。これらの総数は、直刀約100振、鉄鏃1.196～1.360本、刀子88本、馬具2組、飾り弓6張分が確認できる。すなわち、集積の差を単純化すると、直刀1振、刀子1本、鉄鏃約15本の所持が生実・椎名崎古墳群被葬者の平均的な姿として浮び上がる。

III. 鉄鏃の検討

1. 分類と系統の抽出（第3表）

出土した鉄鏃の組成は、刃部の形態、箆被（頸部、棒状部、以下棒状部と呼ぶ）の有無、形状によって以下のように分類できる。

I類　広根系鉄鏃：刃部が大きく、変化に富む形態のものを一括した。末永雅雄博士が、平根式とされたものにほぼ対応する。有機質（木・竹等）の棒状部にはさみ込まれて矢柄に装着されるA・B類と鉄製の棒状部をもつC類があり、前者には、舌状突起をもたないA類と舌状突起のつくB類がある。C類としたものには、棒状部の比較的短いものから、長頸化したものまで含まれるが、刃部の形状にはA・B類との関連を示す変化が見られる。鉄製の棒状部をもつ点ではII類との関連性が認められるが、ここではA・B類の変化と把握しておく。刃部の形態にはa～fの6種類が見られる。

II類　細根系鉄鏃：I類に比べて刃部の幅が狭く尖鋭で棒状部の細く長い形式を基本とするもので、末永博士の分類の細根式に該当する。小型の三角形の系統（a、b）と、両関・両刃の系統とその変化形（c～f）、片関・片刃の系統とその変化形（g～j）がある。

2. 主な鉄鏃の抽出と検討

a　剣身形長頸鏃（第3表II－c、第3図）

細根系長頸鏃のうち、両関・両刃で、鏃身が剣身に似た長刃の平行した形態のものを長三角形と区別している。

生実・椎名崎古墳群のI期からIII期に見られる長頸鏃であるが、6世紀後半の築造が主体の市原市西谷・南向原古墳群等でも同様で、後期古墳鉄鏃の変遷の軸になる鉄鏃である。

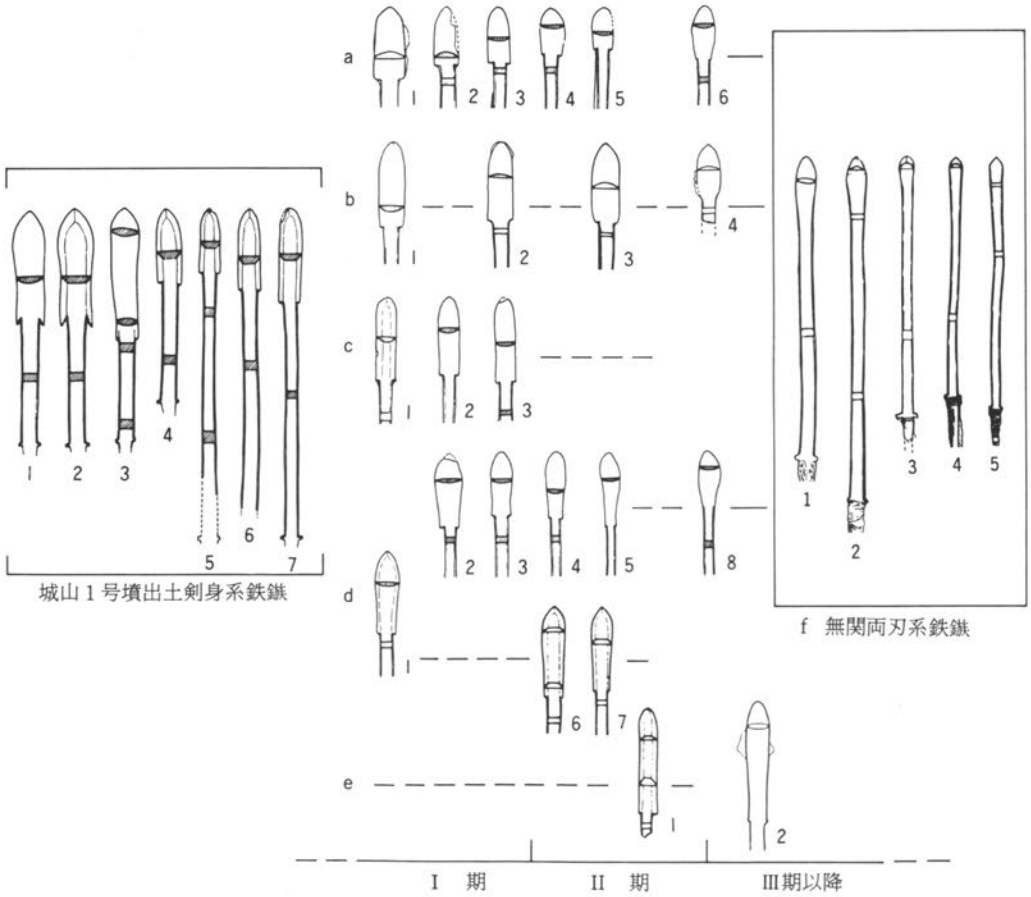
剣身形の特徴は、片平造りの断面台形を呈するものを主としていることで、この系統の鉄鏃には、6世紀前半代の浅い逆刺（腸抉）をもつ片平の剣身に近い形態に類似するものも見られ

古墳名	埋葬施設 形	埋葬施設 規模(m)	I A	I B a	I B b	I B c	I C a	I C b	I C c	I C d	I C e	I C f	II a	II b	II c	II d	II e	II f	II g	II h	II i	II j	鉄鏃総数	直刀	刀子	飾り弓	馬具	その他	時期
南二重堀 4－1	円	27.5直葬		○									○		●	○			○	○			34	★2					I
神明社裏 1－3	前・後	42 直葬											◎		●			◎					36+	4	2				
2－B	〃	28 石棺						○					○		○	○			○				12	1					
2－C	〃	〃 直葬											■		○				◎				49	★4					
1－2	〃	42 直葬		○		○							●		●				◎				36	7	2				II
1－5	〃	〃 直葬																					26	2					
きつね塚 2	円	22 直葬											○		○	◎				○			16+	2					
南二重堀 1－3	〃	25.6直葬			○		○		○				○		○	◎			○	○			30	1	1				
4－3	〃	27.5直葬			○											○				○			3+	1					
有吉三次 1－2	〃	24 直葬											○		○			○		○			5+		2				
2－1	〃	26.5直葬											○		○	○				◎			14+	2	3				
2－2	〃	〃 直葬						○	○				○			○			○	○			16+	3	1			小札	
椎名崎A 1(初葬)	前・後	44.6石室											◎		○				◎				25+	1	1				
馬ノ口 5－1－2	円	26 石棺	○	○			○	○						○	○	○			◎				41+	★1	2			小札	
9－1	〃	6.5石棺		○																			4	1	2				
椎名崎A 2－1	〃	24 石室	○	◎												◎				○			20	3	2				III
3(初葬)	〃	25 石室		○									○			○			○				14±	★5	4	5			
小金沢 4	—	— 石棺	○	○									○										4+		1				
小金沢貝塚 7－1	前・後	36 石棺	○										○	◎		◎			○	◎	◎		58+	★3	1				
8－2	円	19 石室						○		○			○	○				○	○	○	●		35+	5	1				
9－1	前・後	21 石室	○	○																			8	★1	2				
18－3	—	18 石棺						○		◎													12						
馬ノ口 4	〃	26.5石室		○			○	○			○				○	○			◎	○			36+	7	3		1組		
5－2	〃	26 石棺																	○				2		2				
8	〃	14 石棺		○		○		○											○				10		2				
9－2	(〃)	6.5石棺																	○				5+		2				
神明社裏 1－1	前・後	42 石室							○		○								○	○		○	9+		2				
南二重堀 7	円	22 石室		○					○					○	○	○			○	◎			25	1					
生浜 2	〃	21.5石室		○					◎				●			○						◎	35	3	1				
4	〃	24 石室		○							○		○									○	9	1	3				
六通 1－1	〃	26 石室							○	○	◎	○		○		○	●						34	3	1	1			IV
椎名崎A 4		22 石室	○							◎	◎			○		○			○		○		28	1	1				
5	〃	22 石棺						○												○	◎		11		2	3			
1(追葬)	前・後	44.6石室														○				○			13+						
3(追葬)	円	25 石室						○		○	○			○						●		▲	35+						
南二重堀 2－1	円	19 石棺																				○	11	1					
1－1	〃	25.6石棺					○					○											4	1	1				
小金沢貝塚 8－1	円	19 石室															○			○			8		2				
11	—	— 石棺																			○		2	1					
12	〃	— 石棺											○										1						
13	帆・立	26 石棺		○																○	◎		13	1	2				
16－1	円	26.5石室							○												○		3	1	1	2			
16－2	〃	〃 石棺											○										1						
18－1	—	18 石棺																		○	○		17						
馬ノ口 6	円	21 石室															○						3	1	1				
7	〃	22 石室									●			○									22+	1	2				
神明社裏 4	—	— 石室															○					○	6+						
六通 4－2	円	26 石室												■									43						V
椎名崎A 6	円	— 石室												●									20						
7	—	— 石棺												○								◎	12		1				
南二重堀 3	〃	(20) 石室							○		○			○		○	○			○	○		24	★2	4				
小金沢貝塚 19	円	11 石室				○						○				○	○		○			○	7						
馬ノ口 5－3	〃	26 石室	○							○	○	○		○			●		○	○	○		35+	2	3		1組	鉾	
ムコアラク 1	前・後	28 石室															◎						18±						
2	方	16.5石室															○						7±		2				
3	〃	9.5石室										○											2+		1				

凡例：○1～5　◎6～10　●11～20　▲21～30　■31以上　★飾り大刀含む

註：この表では，整理・報告された92基の埋葬施設のうち鉄鏃を出土した54基について表示した。また，追葬の遺物については，鉄鏃のみを分離した。

第3表　古墳別鉄鏃組成一覧



第３図　剣身形鉄鏃の変遷

る。しかし、棘状突起と刃長よりはるかに長い棒状部をもつ系譜はそれに求め難く、むしろ異系統の外来的要素の強いものと思われる。現在の知見では、この初現を明らかにできないが、(註５) ６世紀中葉になって急に類例の増える長頸鏃の一つといえよう。６世紀後半代の小見川町城山１号墳出土(註６)例には、両者の複合した多様な剣身系鉄鏃が見られ(第３図)、３のように両関で関部に切り込み痕をもつものや、棒状部の短い４もある。

生実・椎名崎、市原市国分寺台では、身の幅が比較的広く、関のつくりのしっかりした重量感のあるものがまず先行し、次第に細身で長頸のものが加わっていく流れが窺える。剣身形には、身の幅が広く比較的短いａ、幅広く身の長いｂ、細身でふくらのないｃ、ふくらがあり関に向かってすぼまるｄ、細身で特に身の長いｅがあり(第３図)、各々に変化しているが、Ｉ期は全般につくりのしっかりしたもので一貫し、棒状部も比較的太いものが多い。ａは、II期になると身長が一段と短くなり、かなり小型化して関の不明瞭なａ－６が現われる。これはｂ、ｄにも共通した変化で、ｂ－３からｂ－４、ｄ－５からｄ－８への関の消失と刃部の小型化は、

やがて無関の両刃式として統合される。一方、d－6、7のように原型に近い形で残存する例も若干ある。生実・椎名崎では、III期になると、既に剣身形は長頸鏃の主流ではなくなるが、圧倒的に多い無関の両刃系の中に長身の剣身形(e)がわずかに残存している。また、この剣身形の刃部の形態変化と小型化という変遷は同時に、軽量化の流れでもある点に注目しておきたい。(註7) aでは、a－2の10.14gからa－4の8.66gへ、b－1の11.30gからb－3の8.11gへ、c－1の9.99gからc－3の6.88gへ、d－1の9.58gからd－5の5.55gへ減少しており、総体的に、I期からII期への軽量化の流れを追うことができる。これは、関の不明瞭な過渡的な段階のものを経て、無関化した後の変遷にも窺える。無関の両刃式として定型化した比較的刃部の大きなタイプ（f－1、2）では、計量可能な2が9.71g、刃部が小型化して棒状部も短く細くなる4では6.22gとなり、さらに刃部が薄くきゃしゃなつくりになった5は4.96gまで軽量化する。

剣身形の棒状部の長さには、明瞭な長短の2種〔長：9.5cm（平均)、短：7.5cm（平均)〕があるが、大量に出土した神明社裏古墳群のデータ（棒状部長の平均値）では、1号墳第3主体部：8.57cm、2号墳B区石棺：8.27cm、1号墳第2主体部：8.36cm、1号墳第5主体部：9.14cmとなっており、aタイプの刃部が小型化した1号墳第5主体部で著しく長頸化する。この傾向は、例外的なeを除いて無関両刃系長頸鏃への変遷上に捉えられる。無関両刃系は、比較的刃部の大きい段階（第2表II－d）に最も長頸化し、刃部から棘状突起までの長さは平均12.8cmとなるが、先に述べたように、無関系もまた小型・軽量化する中で再び短くなっている。

以上の剣身形鉄鏃の変遷を古墳群形成の流れに対応させると、剣身形の盛行期は、生実・椎名崎古墳群の直葬系から石棺・石室系へ移行する前後以前に求められ、これは市原台地の後期古墳群にも対応して見られる。両地域とも横穴式石室の採用以後には、この剣身形はほとんど見られなくなり、替わって広根系と無関系長頸鏃が台頭するが、それはまた古墳の築造数が急増する時期でもある。生実・椎名崎古墳群では、剣身形の関の消失からさらに無関化した後の刃部の短小化まで一貫して追うことができるが、この流れは、製作量の増加に対する省力化現象として捉えられる。

剣身形長頸鏃は、後期の長頸鏃の二大系統の一つである片刃系に対する両刃系の主体となった重要な鉄鏃であるといえよう。

b　片刃系長頸鏃（第3表II－g～j）

片刃系とした長頸鏃には、片関の片刃箭鏃と呼称されてきたII－g、無関でふくらをもつII－h、刃部が短かくふくらをもつII－i、かまち切先に近い形態のII－jがある。

総体的な変遷の中でみると、g～jへの流れは、刃部の細身・小型化の流れとして理解できる。一方、棒状部の長さに着目すると、I期からIII期に長頸化の傾向にあるものが、IV期から

再び短くなっていく。これは第8図に示した馬ノ口古墳群出土鉄鏃の変遷図にも現れているが、さらに小型・軽量化していく現象に拠るものである。Ⅰ期からⅤ期の片刃系長頸鏃の重量を見ると、Ⅰ期のⅡ－gでは8.7g平均、Ⅱ期のⅡ－gで8.9g平均、Ⅲ期のⅡ－hで7.96g、Ⅴ期のⅡ－iでは7.70gと減少している。

また、g～jの量的な変遷を見ると、片関のgは、Ⅰ期からⅢ期の前半までまとまって副葬されるが、以後はわずかな数に留まり、Ⅳ期以降にはほとんど見られなくなる。これに替わってⅢ期には無関のh・iの増加が目立ち、Ⅳ期になると無関系が主体的になる。iとjはⅢ期から既に見られるが、Ⅳ・Ⅴ期に盛行する型式で、この時期の片刃系長頸鏃を代表するものといえよう。

c　小型三角形式長頸鏃（第3表Ⅱ－b）

この長頸鏃は、Ⅱ期から見られ、Ⅱ期ではⅡ－aの小ぶりなものに近い大きさの刃部をもつが、Ⅲ期以降は小型・軽量化の傾向をたどり、Ⅳ・Ⅴ期にほぼ定型化する。これは、剣身形の無関化、刃の短小化と関連したもので、広義の両刃系の変遷として捉えられる。

まとまって副葬されるのはⅢ期以降で、Ⅳ期、Ⅴ期には、この形式のみを20本、38本と出土した例がある。この点もまた、国分寺台と共通する現象であり、Ⅳ・Ⅴ期に盛行する長頸鏃として剣身形長頸鏃衰退後の主座を占める場合がある。このことは、Ⅰ期からⅡ期にさかんに副葬された比較的小型の長三角形式Ⅱ－aに替わる三角形系統の新しいタイプとして入ってきた可能性を示していると思われる。

d　広根系鉄鏃（第3表Ⅰ－A・B・C）

前述のように、ここでは棒状部の有無にかかわらず、刃部が大きくて変化に富む形態のものを広根系として一括して把握している。これは、棒状部のつくⅠ－C類が、鏃身を鉄以外の素材で矢柄に装着するⅠ－A・Bの影響下に成立したと考えられるからである。また、Ⅰ－CがⅠ－A・Bと同様なⅡ類(細根系長頸鏃)との組み合わせを示していることも一傍証としよう。

Ⅰ－A・Bは、全期間を通じて見られるが、Ⅳ期以降は極端に少なくなる。最も出土例の多いのはⅡ期からⅢ期で、腸抉をもつB－aが最も多い。一方、Ⅰ－Cは、Ⅱ期の後半からⅣ期の前半に出土例が多く、Ⅴ期に入っても激減する傾向は見られない。また、同じ形態のものをまとまって出土する例が、Ⅳ期に特に多く、刃部の形態が最もバラエティに富むのもⅣ期である。

Ⅰ－Cのうち、C－aは、Ⅰ期以前にも見られる大型の腸抉長三角形式の系統を引くと考えられ、他とは区別すべきかと思われる。これはⅣ期まで見られるが、一古墳での出土数は極めて少なく、儀仗的性格をもつ可能性が強い。C－bは、Ⅱ期からⅢ期に多く見られる幅の狭い長三角形の系統であるが、Ⅲ期後半以降は、c～dがこれに替わってⅠ－C類の主流となり、

Ⅳ期以降にはbは全く見られなくなる。c～dの基本形は、長三角形から出発したと考えられるが、直角関のcの影響下にdの五角形が生まれ、腸抉長三角形のeが正三角形～横長の三角形へ変化した段階でfが加わっているものと考えられる。fはⅣ期とⅤ期にのみ見られ、方墳で出土している点も注目される。方墳では、他に細根系の棒状部が数点出土しているが、広根系は、これのみである。

また、椎名崎A支群4号墳の菱形の広根鏃は、三角形の系統から派生したとは考え難い形態で、外部からのインパクトによるものと考えられる。

一方、鉄鏃総数に占める広根系の割合(総数10本以上の出土例に限る)を見ると、Ⅰ期4.5%、Ⅱ期10.4%、Ⅲ期33.0%、Ⅳ期20.6%、Ⅴ期7.8%で、Ⅲ期、Ⅳ期の割合の高さが目立つ。これを市原市国分寺台と比較してみると、Ⅰ期9.7%、Ⅱ期15.0%、Ⅲ期19.25%、Ⅳ期0%、Ⅴ期9.5%で、生実・椎名崎の広根系鏃の扱いとの差を示している。中でもここでⅠ－C類とした長頸の広根鏃のあり方が特徴的で、54例中24の埋葬施設に出土しており(44%)、5本以上10本未満出土した例が9例(17%)、10本以上の例が5例(9.2%)見られる。国分寺台では、12例(48%)にⅠ－C類が出土しているが、10本以上の例はなく、5本以上が1例あるのに留まっており、1本しかもたない例が最も多い(平均2.6本)。

県内で他にⅠ－C類をまとまって副葬する例は、成田市公津原古墳群(註8)に3例認められる。約50基の6世紀前半～7世紀代の調査古墳のうちの3例であるが、10本以上のⅠ－C類をもつ例が2例あり、生実・椎名崎のⅢ・Ⅳ期併行期には直角関の三角形、および五角形を呈するものをもつ点が共通する。木更津市請西古墳群(註9)にも20基の後期古墳の中に1例だけ8本のⅠ－C類をもつ例があるが、いずれにせよ、生実・椎名崎の様相とは異なるものである。

また、埼玉県では、東松山市西原古墳群(註10)の3基中の1基に5本、同市柏崎古墳群(註11)の4基中の1基に9本、大里郡鹿島古墳群(註12)の34基中に3例あり、5本、9本、25本の副葬が見られるが、鹿島古墳群の例にしても副葬される比率は少ない。

なお、Ⅰ－Cの棒状部を含めた形態を見ると、棒状部の長短によって新古に分けがたく、むしろ古墳ごとに異なる規格性をもつ傾向がある。特に、同一形態のものがまとまって副葬される例にその傾向が強く、各々の被葬者に応じて配布された可能性が高い。

3．鉄鏃の組み合わせと変遷(第3表)

生実・椎名崎古墳群の鉄鏃から見た変遷は、大きく3期に分かれ、各支群の拠点となる古墳が築かれ始めた時期、群形成の発展期、衰退期に各々対応する。これをさらに群形成期を2段階に、発展期を2段階に分けることが可能である。また、参考として直前の時期のものが市原

市国分寺台古墳群に連続して見られるので確めておきたい。

直前の時期と捉えられるのは、市原市西谷9号墳Ⅰ期の周溝内土坑出土例、南向原3号墳中央施設出土例、そして、6世紀前半～中葉の代表的な古墳として埴輪、馬具を有する西谷10号墳、根田1号墳出土例である。これらの古墳には、陶邑Ⅱ期第一段階から第二段階に比定される須恵器が伴出しており、2例とも鉄鏃には剣身形の長頸鏃が含まれるが、西谷10号墳には主体的で、根田1号墳では片関片刃鉄鏃が主体である。また、広根系鉄鏃は大型で、棒状部が長くないものである。

この時期を代表する上総の前方後円墳の調査例は、養老川南岸の姉ヶ崎古墳群中に在り、山王山古墳[註13]、および原1号墳[註14]がある。いずれも、全長70mクラスで埴輪をもち、姉ヶ崎古墳群の首長系列の墓と考えられる古墳であるが、特に山王山古墳は、金銅製冠、単竜式環頭大刀、変形四獣鏡等の卓越した副葬品をもつことで知られる。この山王山古墳の鉄鏃は、鏑造細根柳葉形が主体で、他に鏑のない広根柳葉形、重抉広根長三角形、腸抉片刃箭形があり、国分寺台の古墳群とは大きく系統の異なる組み合わせである。

これに後続する資料は、姉ヶ崎古墳群中には求められないが、小糸川中流域の君津市白駒1号墳[註15]（全長約45mの前方後円墳）では、剣身形長頸鏃を明らかに主体とする鉄鏃の組み合わせが認められる。

一方、6世紀後半には下総を代表する古墳として市川市法皇塚古墳[註16]、小見川町城山1号墳が築造されている。下総の東西に位置する2基は、後者が規模、副葬品等で優るものの、共通した要素が見い出され、法皇塚古墳に存在する要素の大半は、城山1号墳にも存在する。

鉄鏃についても、城山1号墳が多種多様なものをもつが、法皇塚古墳と共通するものに剣身形が挙げられる。法皇塚古墳出土鉄鏃は46～48本あり、40本が両関両刃系統で、うち21本が剣身形である。城山1号墳例は、前掲したように剣身系にも多様な要素を含んでいるが、法皇塚古墳例を含めてこの時期には大型古墳の鉄鏃の中で、剣身形が両関系の独立したタイプとして副葬され、特に法皇塚古墳では組成の主体となっている点に注目しておきたい。

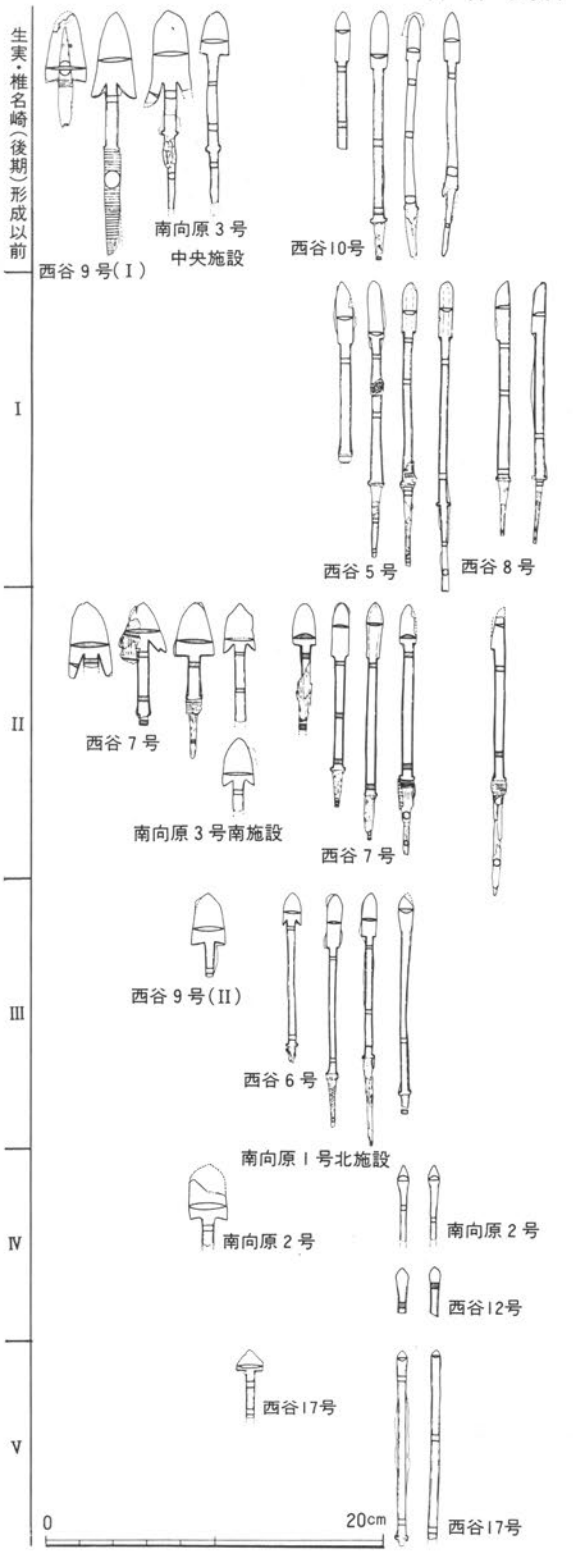
Ⅰ期：この時期には、生実古墳群の南二重堀支群と椎名崎古墳群の神明社裏支群に例が見られる。南二重堀4号墳例は、つくりのしっかりした短めの剣身鏃が主体を成し、無関系のⅡ－d、Ⅱ－hが少量入る組み合わせで、広根系の有頸鏃（Ⅰ－C）は見られない。神明社裏では、剣身を主体的にもつ例と、小型～中型の三角形Ⅱ－aを主体とする例があり、両刃系のつくりのしっかりした長頸鏃で一貫するが、2号墳B区石棺では、無関のⅡ－dが加わり、南二重堀と同様の組み合わせになる。この石棺は、現在のところ当古墳群の軟砂岩使用組み合わせ式石棺の初現になると思われる。

この時期の国分寺台では、根田１号墳前方部施設、西谷５・８号墳がある。鉄鏃はいずれも剣身形の長頸鏃が主体で、この時期は、国分寺台での剣身形長頸鏃の盛行期である。

II期：生実・椎名崎古墳群では、神明社裏１号墳第２・第５主体部をはじめ、12基の埋葬施設出土の資料が挙げられる。これには、椎名崎１号墳の横穴式石室初葬時のものが含まれる。鉄鏃の組み合わせから見ると、剣身形、片刃系の長頸鏃を主体とする神明社裏１号墳第２・第５主体部例がＩ期に近い様相を示すが、その他の古墳では、剣身形は主体的でない。これに対し、無関の両刃系統の長頸鏃が増えており、この中には、剣身形の関が退化して消失したような刃部の比較的長いものも含まれている。一方、片刃系についても、無関のものを併せもつ例が増えている。

国分寺台では、西谷７号墳、南向原３号墳南施設があり、西谷７号墳では剣身形の長頸鏃が主体であるが、ややきゃしゃなつくりになっている。また、これらに先行する山倉１号墳は、円筒・形象・人物埴輪をめぐらした前方後円墳で、横穴式石室を内部施設としており、生実・椎名崎古墳群の横穴式石室の初源に近い時期の古墳として注目される。

III期：椎名崎Ａ支群の３基をはじめ15基の埋葬施設が挙げられ、すべて軟質石材による石棺・石室である。この内石室は、



第４図　市原市西谷・南向原古墳群出土鉄鏃

9基を占め、当地域における横穴式石室の導入から定着期と言える。前室[註17]の長さが、後室の⅓以上あるプランと、前室の短小なものが、初めから併存し、後者は、生実古墳群に多い。また、敷石・底石をもつ石室、石棺が大半を占める。

鉄鏃は、無関の長頸鏃が主体になり、特に両刃系のII－dが多いが、片関の片刃、両関の両刃も存在し、剣身形はかなりきしゃなつくりで軽量化したものになっている。また広根系では、直角関の長三角形（I－C－c）、それから派生したと思われる五角形（I－C－d）、腸抉三角形（I－C－e）が加わって、多様な様相を呈するようになる。さらに、II期に見られなかった現象として、小型の三角形式長頸鏃（II－b）を多くもつ例が見られ、棒状部の短いものや、刃部の大きめなものが目立つが、主体的なものではない。

国分寺台では、西谷6号墳、同9号墳II期石棺、南向原1号墳北施設が挙げられる。

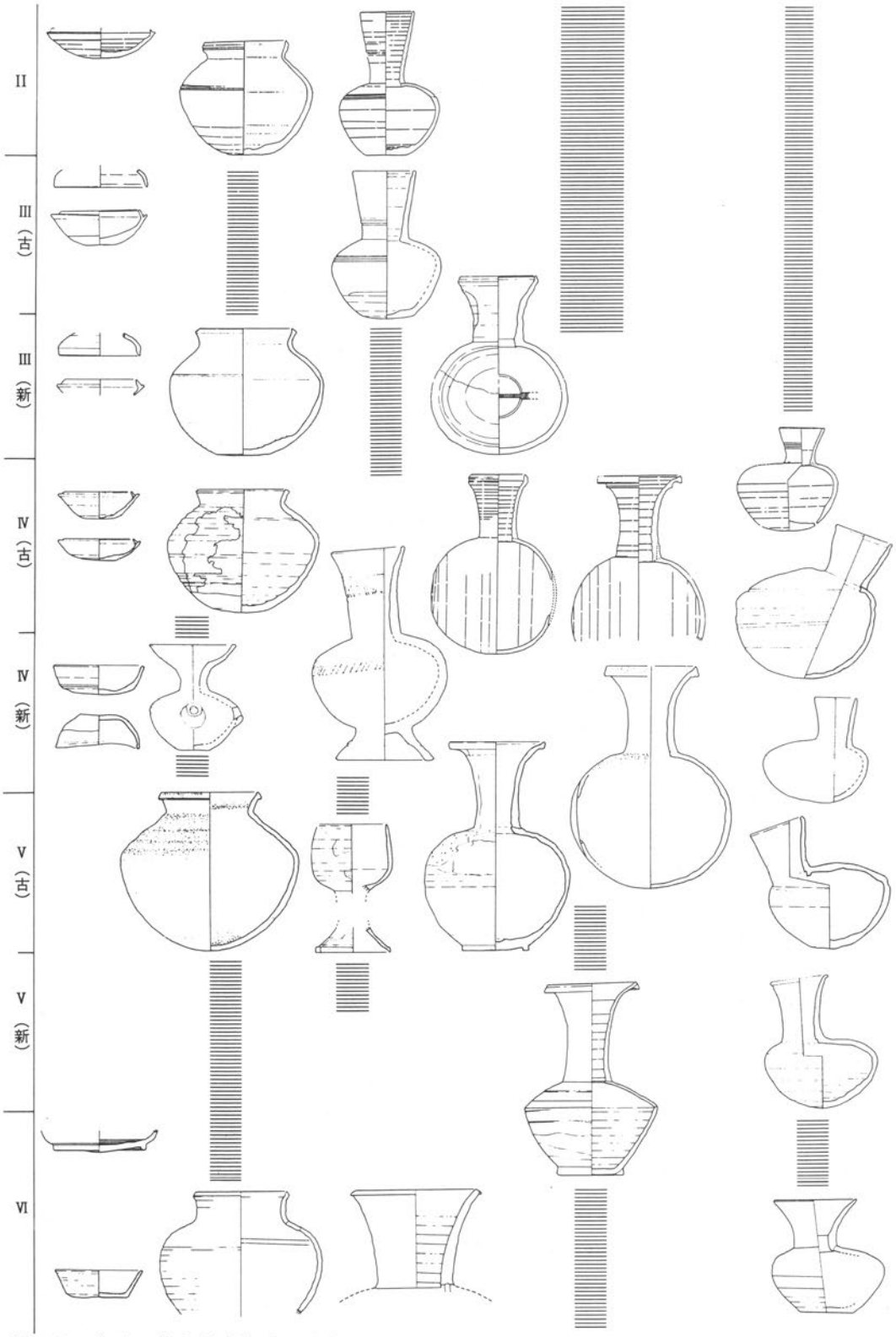
IV期：六通1号墳第1石室をはじめ17基の埋葬施設が該当する。すべて軟質石材使用の石棺、石室で、その割合は半々である。III期に引き続いて、石棺、石室が展開し、その盛行期を迎えた時期といえよう。しかし、一方では、石室の変容が目立ちはじめ、前室の形骸化したものや、大型の石材を用いた簡略な構造のものが増える。また、石棺も簡略化され、底石は用いられなくなる。

鉄鏃は、広根の長頸鏃が最も多く見られる時期で、10本、12本とまとまった量を出土する傾向がある。鏃身の形態もさらにバラエティーに富み、菱形（椎名崎4号墳のみ）や横長の三角形に近いI－C－fが加わる。長頸鏃では、無関の片刃系（II－d、e）、小型の三角形式（II－b）が主体的になり、刃部の小型化、棒状部の軽量化が進む。特にII－bは、この時期に最もまとまって副葬される例が多い。

国分寺台では、発表資料が少ないため、不明な点が多いが、比較的大量の須恵器を出土した西谷12号墳、南向原2号墳が併行すると考えられる。鉄鏃の出土量は、前掲したように少なく、本来の組み合わせを示すものではないが、小型化した無関の両刃（II－e）が主体になると思われる。

V期：前方後円墳を中心とした一つのまとまりから谷奥部へ展開する大きな変換期にあり、方墳の導入と展開が始まる。六通4号墳第2石室以下9基の埋葬施設があり、石棺は見られなくなっており、鉄鏃はすべて横穴式石室の出土例で、追葬時の副葬品を示すとも考えられるが、六通4号墳第2石室のような一種類に限られた鉄鏃の出土例もあることから、この時期までは、石室の構築が続いていたと思われる。

石室の規模（後室の規模）はそれほど変わっていないが、副葬品は、質量共に貧弱になり、鉄鏃の出土量も少なくなる。方墳では、特にその傾向が強く、鉄鏃の出土量は激減する。ムコアラクの方墳群から出土した鉄鏃は、9基の埋葬施設からわずか9点（破片も含む）に留まっ



第５図　生実・椎名崎古墳群の須恵器

ている。

この時期の鉄鏃は、小型三角形（II－b）、無関の両刃系（II－d・e）、片刃系（II－h・i・j）の長頸鏃が主体であるが、IV期に比べさらに小型・軽量化の傾向にある。II－e、II－i・jでは、刃部が極端に小型化した例が見られる。また、IV期から見られた広根系の横長三角形（I－C－f）は、方墳採用後も存続する。

以上のように、生実・椎名崎古墳群の鉄鏃から見た変遷は、大きく5段階に分けられる。この変遷の年代幅については、I期を6世紀中葉～第3四半世紀、V期を7世紀中葉～第4四半世紀に捉えている。

一方、古墳時代後期のタイムスケールとして最も有効な遺物である須恵器は、量的に少なく（総数約100個体、出土率50.7%）、特に蓋坏の資料が不十分だが、第5図では、器種ごとの変化と組み合わせを上記の鉄鏃の変遷と対照した。

III期（新）～IV期（古）段階には、市原市国分寺台では乳頭状のつまみのつく蓋坏が出現し、以後は蓋と身の逆転した蓋坏の系譜が続いているが、当地域では現在のところ出土例がない。また、IV期（新）段階は、扁平つまみの小形の蓋坏が出土してもよい時期と思われる。

また、VI期としたものは、石室への最終的な供献に用いられたと考えられる。

4．小支群内の組み合わせと変遷

馬ノ口古墳群出土の約180点の鉄鏃について、組成と系統内の変化の検討を試みたことがある。(註18) その中で、小支群内の古墳の展開と推移に対応して鉄鏃の組成と形態変化にいくつかの傾向性を見い出した。この小支群内の変遷を再検討し、さらに椎名崎古墳群A支群、神明社裏古墳群の例を追加して検証してみたい。

a　神明社裏古墳群（第6図）

馬ノ口古墳群、椎名崎A支群（1次）より一段階古い資料は、神明社裏古墳群の調査によって明らかになった。

椎名崎C支群とされた群の東部分である神明社裏古墳群は、人形塚を擁する椎名崎B支群に対峙して広義の椎名崎古墳群の中心的な位置の一翼を占める支群である。前方後円墳5基、円墳16基、方墳1基が確認されているが、神明社裏古墳群として調査したのは、前方後円墳3基、円墳6基、方墳1基である。全体的な整理は行っていないが、ここでは他の支群にさかのぼる資料がまとまって出土した2基の前方後円墳の鉄鏃を取り上げたい。

資料化した鉄鏃は、2重周溝をもつ墳丘長約42mの前方後円墳（仮称1号墳、以下1号墳とする）内に検出された3基の直葬施設、墳丘長28mの前方後円墳（仮称2号墳、以下2号墳と

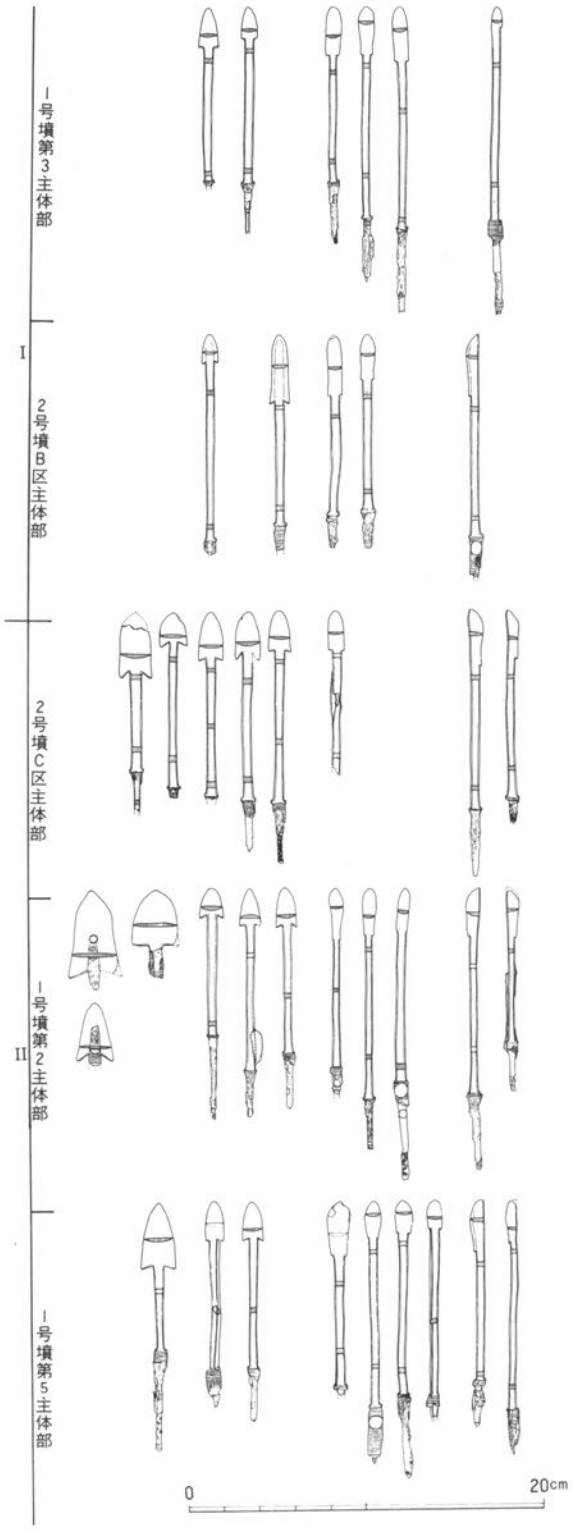
する）内の１基の石棺、および直葬施設から出土したものである。

直葬の施設からは、各々26～49本の形態の判る鉄鏃が出土しており（第３表）、各々の組成と傾向性をつかむことが可能である。

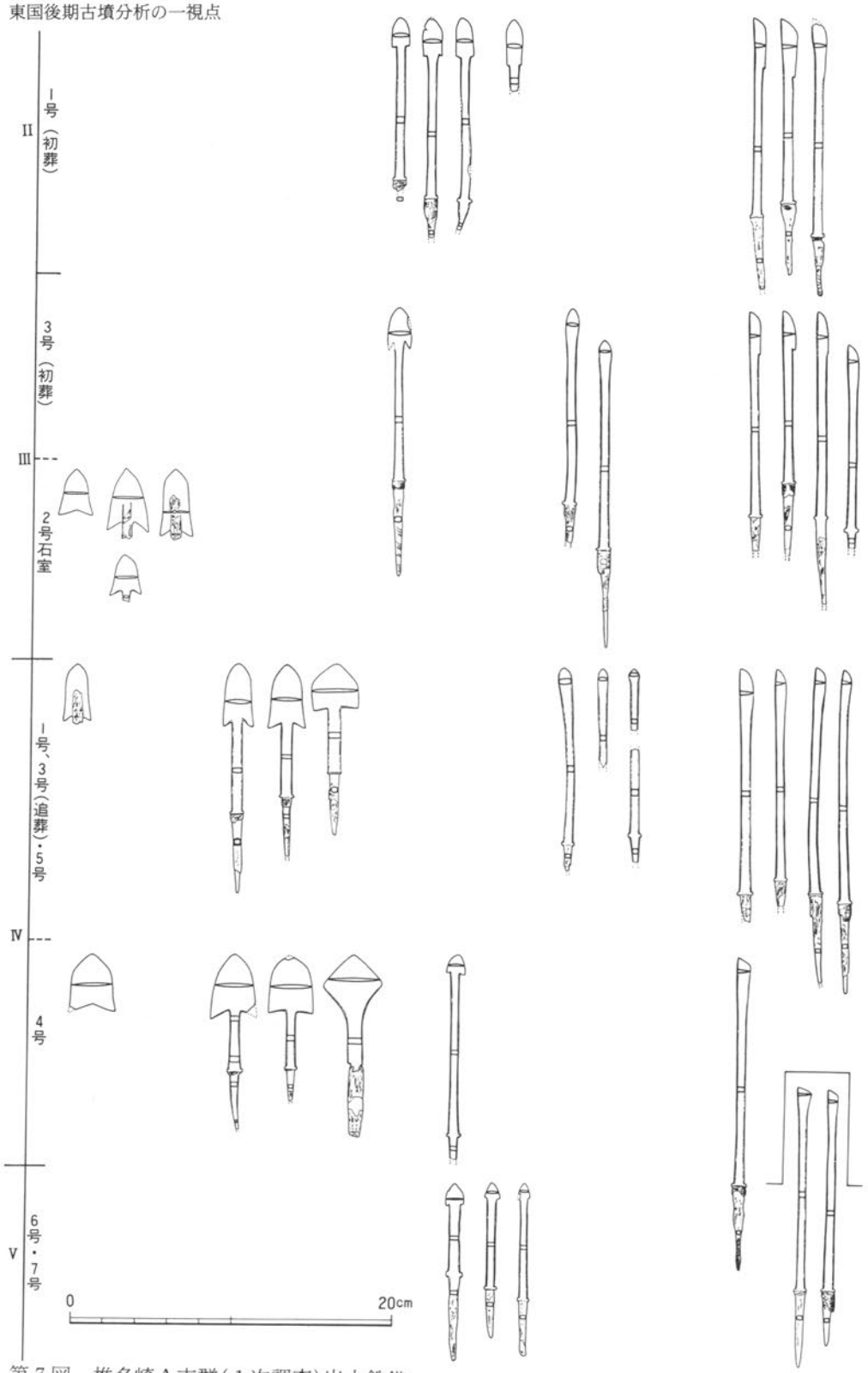
これら５基の内部施設出土資料は、大きく２時期に分けることが可能で、Ⅰ期には１号墳内の１基の直葬例と２号墳の石棺が挙げられ、１号墳の他の２基の直葬例と２号墳の直葬例がやや後出する。

神明社裏に見られる組成の特徴は、小型～中型の長三角形（II－a）と剣身形（II－c）が主体となっている点であるが、各々の組成の特徴を抽出すると、直角関のII－a、刃部が大きくしっかりした造りのII－c、片関で左右の刃部の形態の異なるII－fから成る１号墳第３主体部から大型・長頸の広根鏃（Ⅰ－C－a）と片関片刃長頸鏃（II－g）が加わる２号墳c区主体部への変遷を見ることが可能である。２号墳B区石棺は、細身で刃部がほぼ平行する腸抉長三角形とバラエティに富む剣身形の組み合わせが特徴でC区主体部より先行する可能性が強い。

１号墳第２主体部、同第５主体部では、Ⅰ－B、Cの広根鏃が加わり、剣身形のつくりがくずれ始めて、小型化・無関化が進む。無関の両刃II－dとの区別が難しいものが何例かあり、刃部の形態の不明瞭なものが29本もあることから、II－dが含まれる可能性が高い。



第６図　神明社裏古墳群出土鉄鏃



第７図　椎名崎Ａ支群（１次調査）出土鉄鏃

b　椎名崎A支群(1次調査区)(第7図)

椎名崎A・B支群は、南北250m、東西350mの範囲内に21基の古墳が所在した群で、やせ尾根上の1次調査区(A)と小金沢貝塚内の2次調査区(B)の2群に分けられる。1次調査区には、比較的大型の墳丘をもつものが所在し、全長44.6mの前方後円墳をはじめ、2重周溝をめぐらす径24mの円墳、および22～25mクラスの円墳3基が在り、単独の石室、石棺各1基を加えた7基から成る。小金沢貝塚内の14基は、ひき続いて築造されたひと回り小型の前方後円墳（30mクラス）と円墳群（15～20mクラス中心）から成るが、いずれも軟砂岩使用の石棺・石室系古墳群の中心となる群である。

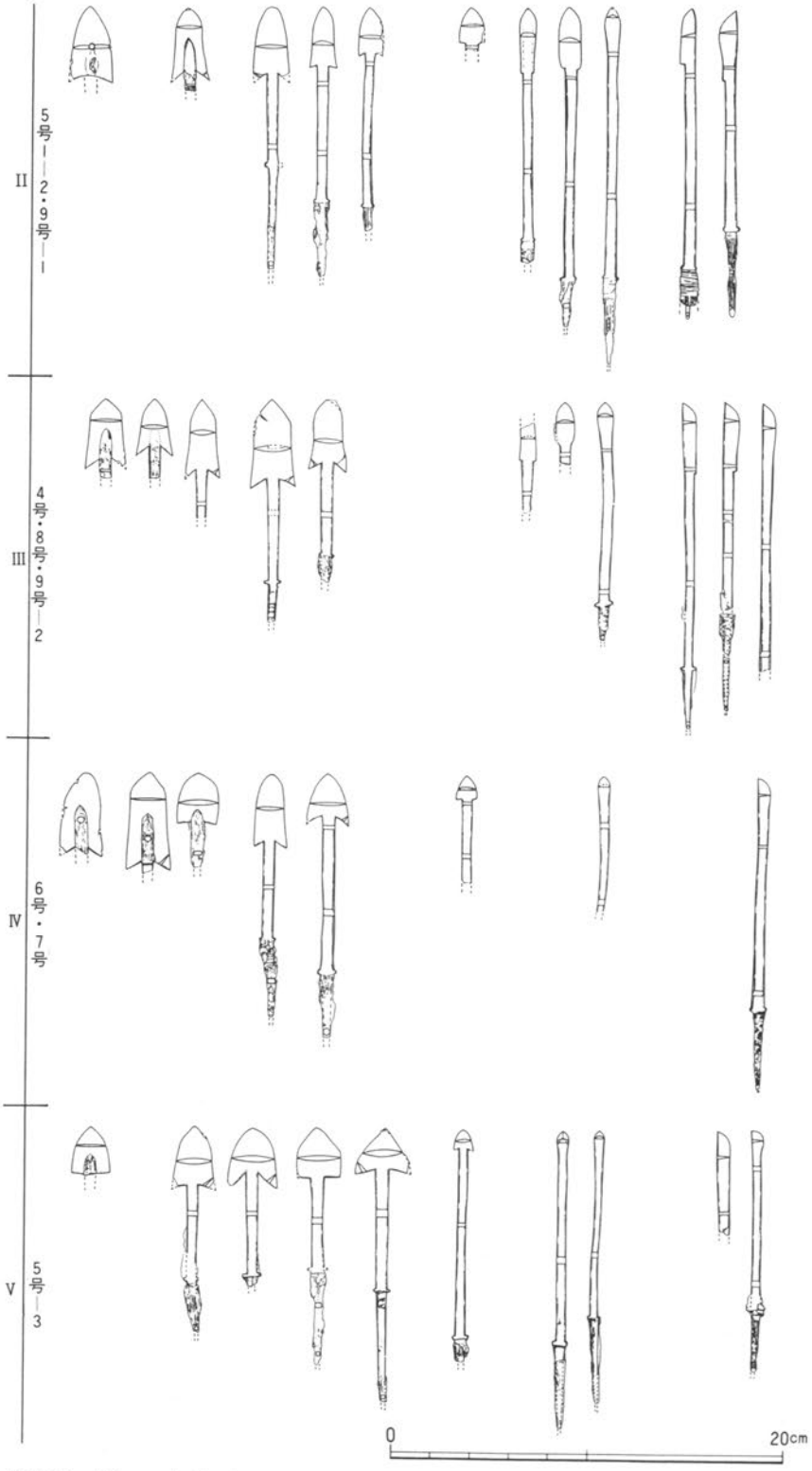
1次調査区の前方後円墳（1号墳）の横穴式石室は、1段目の石材を石棺風に縦長に用いて2段目以降は小型の石材を小口積に配する手法で築かれており、当地域の横穴式石室採用の初期に属する例であると思われる。A支群はこの前方後円墳の築造を契機に展開し、2次調査区へと拡大している。3号墳の総数59本を最高に、7基の埋葬施設から200本近い鉄鏃が出土しており、3基に鉄製の弓飾り金具が検出された群である。また、1墳丘内に複数の埋葬施設が存在したのは、石室と石棺を併設した2号墳のみで、横穴式石室の併設はなく、石室内の遺物配置によって追葬が行われたことが明らかな例もある。

鉄鏃の組成は、馬ノ口にほぼ対応した変遷が見られ、1号墳初葬時→3号墳初葬時・2号墳石室→1号墳、3号墳追葬時・4号墳・5号墳→6号墳・7号墳の4期に分けることができる（第7図)。1号墳、3号墳では、鉄鏃の出土状況、および耳環、玉類の出土位置から少なくとも1回の追葬が行われていることが確実で、初葬時、追葬時の組み合わせを分離できる。また、2号墳にも耳環と玉類の位置から追葬がうかがえ、鉄鏃は追葬時の副葬品と考えられるが、これは周溝内出土の須恵器が鉄鏃の示す年代観より先行する特徴をもつことと矛盾しない。

馬ノ口に比べて広根鏃の変遷が不明瞭であるが、IV期に長頸の広根鏃（I－C）が盛行し、多様な形態のものが現われる点は全体的な傾向に合致する。なお、菱形のI－Cは、4号墳のみに見られる形態である。細根系鉄鏃は、1号墳初葬時の小型三角形（II－a)、剣身形（II－c）と片関片刃形（II－g）による組み合わせから、次第に無関化し、刃部が小型化する流れを追うことができる。小型三角形（II－b）はIV期以降に見られるが、V期では棒状部がより短くなり、6号墳の鉄鏃はこれのみで構成される。また、この段階の片刃系鉄鏃は、稜の明瞭なつくりのかまち切先となっている。

c　馬ノ口古墳群（第8図)

馬ノ口の後期古墳群は、箱式石棺、横穴式石室を埋葬施設とする6基の円墳群である。東西、南北とも約110mの範囲に、墳丘径25mクラス2基、20mクラス2基、15mクラス1基、10m以下1基が築かれ、当地域では平均的な規模の古墳群といえる。10基の主な埋葬施設があり、存



第8図　馬ノ口古墳群出土鉄鏃

続期を4期（II～V）に分けることが可能である。

鉄鏃の変遷を概観すると、広根鏃はII～V期を通じて見られるが、棒状部をもつI－CはIII期以降に形態変化が進み、V期に最も多くの種類が見られる。

III期とIV期の間に組成の差を見い出し得る細根系鉄鏃（II類）のうち両関・両刃系では、小型三角形の長頸鏃（b）がII期からあり、刃部が比較的大きく重量感のあるものが、IV期に小型・軽量化し、V期では非常にきゃしゃなつくりになる。また、II・III期には、剣身形（c）と関のやや退化した形態で刃部が比較的大きく重量のあるdがそろっているが、IV期では剣身形がなくなり、dのみとなって、V期になるとdが小型・軽量化したeとなる。片関・片刃系は、II期には関のしっかりした片刃箭鏃（g）であるが、III期では関のわずかに残る形態と関のない片刃（h）になり、IV期で関の残るものがなくなってhの刃部が小型化し、V期になるとさらに小型・軽量化していわゆるかまち切先やなぎなた形の刃部をもつものが見られるようになる。

5．伴出遺物の検討

冒頭に示したように、生実・椎名崎古墳群の武器・武具の出土率は、埋葬施設の78%、古墳総数の83%に出土しており、これは装身具の出土率が各々51%、61%であるのに比べても高い割合である。

まず、鉄鏃についで出土率の高い大刀について見ると、総数約100振のうちI期に2振、II期に1振、III期に3振、V期に1振、計7振の飾り大刀が出土している点が注目される。I期の1振は鉄製円頭大刀、他の1振は部分的な金銅装大刀である。II期の例は、金銅装の圭頭大刀、III期には、(金)銅装1振、銀装2振、V期に鉄製足金物をもつ大刀1振が出土している。把頭の形態のわかるものは2例のみであるが、古墳群の成立期から盛期には有力被葬者が飾り大刀佩領層としては下位に位置づけられたことが窺えよう。

また、I期では生実・椎名崎に1振ずつ、II期は生実に1振、III期は椎名崎に3振が集中し、V期の例は生実に出土するという分布を示す。

一方、鍔について見ると、飾り大刀は銀装の1例を除いてすべてはみ出し鍔であるが、その他のはみ出し鍔はII期に多く、それも大半は小刀に装着されるという限定的な使用である。大型の鍔は、無窓のものが圧倒的に多く、60%を占める。I期にも見られるが、III期とIV期に最も多い。有窓の鍔には、八窓、六窓があり、八窓はII期から、また六窓はIII期からあるが、IV・V期に多い。このことからIII期までは、飾り大刀を除いて、一般的な無窓の鍔が大半を占めていたことが判る。

この他の鉄製武器では、鉄製の飾り弓金具の出土が特徴的なあり方を示している。この飾り弓金具は、III期とIV期に見られ、椎名崎古墳群に集中している。最近の調査例でも、神明社裏でIII期の例が、1例加わっており、椎名崎古墳群という中央有力者グループに片寄って分布する可能性がより濃厚になった。椎名崎古墳群最盛期のIII・IV期は、長頸の広根鏃をはじめ、最も鉄鏃の種類が豊富で、しかも大量に副葬される時期であることは、この飾り弓のあり方と重要な相関関係をもつものといえる。

武具類では、小札が挙げられる。小札は、II期の生実古墳群にのみ検出されているが、いずれも4枚ずつで、使用時の重ねをそのまま残している例と改めて布に包まれていたと見られる例がある。後者がやや長く、孔の配置も異なるが、幅がほぼ等しいことから、同一の製品の一部を分有していたものとも考えられる。今後も生実古墳群に片寄って出土すれば、より性格が明らかになると思われる。

一方、馬具の出土は、現在のところ馬ノ口支群に限られており、III期とV期に1例ずつ副葬されている。2例とも鉄製の素環鏡板付轡と鉄製吊金具付木製壺鐙の組み合わせで、鏡板はいずれも立聞に鉸具が作り付けられたものであるが、V期の副葬例は鏡板が逆三角形に近い形態で、引手には13〜14回のひねりが加わる特徴がある。また、前者には馬装と考えられる金銅装の花弁形飾り金具・飾り鋲が伴出し、後者は石突（鉾）を伴っている。2例ともほぼ同規模、ほぼ同数の大量の鉄鏃をもつ有力円墳で、各々重要な地位を担った同系の被葬者が考えられるが、後者は、生実・椎名崎古墳群最後の有力構成員の一人であったと推定される。

IV. 生実・椎名崎古墳群分析の展望と課題

東京湾東岸における最大規模の後期古墳群を分析するに当たって、まず、最も出土率が高く量的にも多い鉄鏃を取り上げ、分類と編年を通して古墳群の推移を追ってみた。

鉄鏃の分類では、刃部の形態を第1の基準として分類した。特に刃部の大きく変化に富む形態のものを、有頸、無頸の区別なく広根式として一括し、同様の扱われ方をした鉄鏃と考え、むしろ盛行期が前後するものと捉えた。また、古墳時代後期を代表する細根系長頸鏃については、刃部の形態を小三角形系、両関・両刃系、片関・片刃系の3系統に大別し、系統内での形態のくずれ、無関化、小型化等の変遷を追い、相互が関連して変化していることを明らかにした。一方、これらの長頸鏃の特徴である棒状部の長さの変化にも重点を置いたが、合わせて重量の変化に着目し、長頸化の傾向から再び短頸化する変化が小型・軽量化として置き直せることを明らかにした。

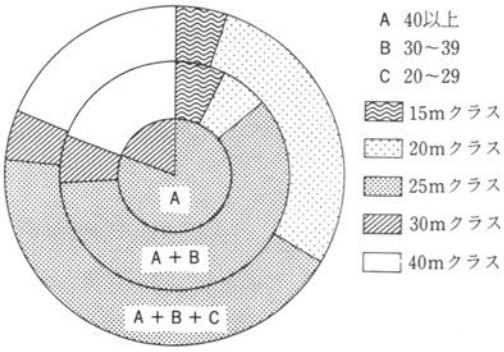
これらの分類の中で、当古墳群形成期（I・II期）に重要なあり方を示す長頸鏃として、剣

身形長頸鏃を抽出し、両関長三角形長頸鏃から分離した。この剣身形長頸鏃の6世紀後半代における盛行は、市原市国分寺台の調査成果にも明確に表われており、6世紀後葉・末葉をピークに6世紀前半代から7世紀前半代まで主体的に副葬される長頸鏃である。6世紀代の例は、直葬系の埋葬施設から出土したものが大半を占めており、この意味では当古墳群の横穴式石室出現前夜をも代表する鉄鏃である。

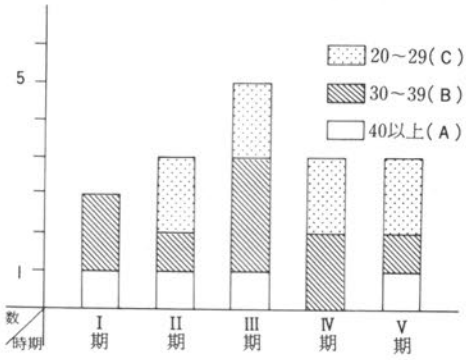
一方、古墳群の盛期～衰退期であるⅣ・Ⅴ期に特徴的な鉄鏃には、小型三角形式長頸鏃を取り上げた。これは、従来腸抉長三角形式長頸鏃として、大型の長三角形式と同系に扱われていたものであるが、小文で示した小型の長三角形式長頸鏃（Ⅱ－ａ）の影響下に正三角形化したものと捉えられる。7世紀中葉前後に単独でまとまって副葬される例が多く、刃部の形態を保ちながら、大きさ、棒状部の長さ等に変化の追える鉄鏃である。

この古墳群の盛期～拡大期（Ⅲ・Ⅳ期）に最も特徴的な鉄鏃は、広根系の長頸鏃である。刃部の形態には、逆刺の比較的深いものもあるが、直角関の長三角形、五角形、菱形に至っては、実用性に乏しいことは否めない。また、全体的には細根系長頸鏃が圧倒的多数を占め、これに対し特殊な使われ方をした鏃であることは明らかである。これらが数本に留まっているならば、実用性の高い細根系長頸鏃に対する特殊性に注目して、鳴鏑矢に用いられた可能性も考えられるが、十数本まとまって副葬した例や、これのみを副葬した例からは、被葬者の戦場での役割を象徴する矢としても検討する必要がある。一つには、特殊な矢として神聖な意味をシンボル化したものと捉え、これをもつ被葬者に一定の地位を考える見方である。広根鏃を5本以上もつ古墳の墳丘規模は、14基中2基を除いて20mクラス以上で、うち7基が25mクラス以上である。鉄鏃総数も多く、9基が30本を超えており、3基に飾り大刀、2基に馬具の出土が見られる等、古墳群全体の中での地位の高さを示す要素は多い。また、一方では、弓の性能、防具の変化と多様化に拠って用いられたことも考えられよう。さらに、想像をたくましくすれば、飛距離の長い集団戦に適した細根系長頸鏃に対して、個人戦等の接近戦用の矢として用いられたことも考えられ、戦闘形態の分化と多様性を示すとの捉え方も可能であろう。そこでは、歩兵の分化によって上位集団と下位集団が存在し、前者が個人戦に近い役割を担う倭様の戦闘形態の崩芽を予測することも可能かも知れない。この戦闘形態の多様化が当地域のⅣ・Ⅴ期に進行するとすれば、前述した周辺部の例とも時期的な併行関係が認められ、特にⅤ期以降ではここでⅠ－Ｃ－ｆとした逆刺の深い三角形系統（埼玉県、群馬県ではいわゆる飛燕型鉄鏃に類するものがほぼ対応して見られる）を含む長頸の広根鏃のみを数本副葬する例が多くなることとも相関する。

また、この広根系長頸鏃は、古墳ごとに刃部の形態にまとまりがあり、規格性が強いことから各々の被葬者に応じて配布された可能性が高い。刃部の形態が異っても同一古墳では棒状部



第４表　墳丘規模と鉄鏃副葬数



第５表　有力鉄鏃出土古墳の推移

長の比率が近似するという傾向もあり、あるいは古墳ごとに製作された可能性もないとは言えない。今回の分析では、他の形式に関する古墳ごとの規格性の問題には至らなかったが、大量に副葬された小型三角形式長頸鏃も非常に規格性が強く、剣身形、片関の片刃鏃にも古墳ごとに棒状部の長さの比率が一定するものがいくつか見られる。この点については、製作地の問題も含めて、今後の検討課題としたい。

生実・椎名崎古墳群では、鉄鏃を主体とする武器・武具の副葬のあり方が古墳の性格を示す最も有効な基準になると考えるが、これはまた、墳丘規模、埋葬施設の規模・構造との相関関係の上に成立するものである。埋葬施設については、横穴式石室の構造を検討した後に検証することにしたい。

そこで、墳丘規模と大量に鉄鏃を出土した古墳の相関関係を示し、大量出土古墳の変遷を確認しておきたい。

第４表では、埋葬施設１基に20本以上の鉄鏃を出土した古墳を取り上げている。これは１基当りの平均出土数13.2本を目やすに、伴出遺物の内容も含めて設定した。20本以上を出土した例は、第３表に示した54基のうち22基で、さらにA：40本以上、B：30～39本、C：20～29本の３段階に分けてみると各々５例、10例、７例となる。これを墳丘規模15mクラス～40mクラスに分けて対応させたのが第４表である。特徴的なのは、Aに40mクラスの前方後円墳が含まれず、25mクラスの円墳が主体になっている点である。これは、前方後円墳がその地位を鉄鏃の量で示す必要がなく、むしろ中型の円墳では鉄鏃の量・種類が直接に地位・身分を反映しているからである。Bには40mクラスの前方後円墳も含まれるが、やはり主体は25mクラスの円墳で、Cを含めると20～25mクラスの円墳が70％以上を占めている。また、III期後半以降には、30m以上の前方後円墳の築造はなく、前方後円墳を拠点とする体制が消失する状況にあることを示しており、25～28mクラスの円墳が最も重要な位置を占めるようになる。この墳丘規模・

形態に見られる特徴は、副葬品の内容とともに被葬者層の性格を知る基準になると思われるが、古墳群造営の全期間を通して、20～25mクラスの円墳被葬者群が大量の鉄鏃を実際に駆使した実戦的な性格をもっていた可能性が1つ考えられる。また、当地での「前方後円墳体制」の消失と中型円墳主体の群構成は、被葬者群の変質を具現化した問題としてさらに周辺部の後期古墳群の分析と比較検討が必要である。

以上のように、今後の分析の課題は多岐にわたるが、この後期古墳群の有力被葬者群の性格を最も特徴づけるのは、次の2点である。まず、後期のある段階に急速に勢力を拡大している点が挙げられる。これは特に中央部の椎名崎古墳群に顕著で、より有力な周辺の勢力、あるいは中央の勢力との交渉によって、拠点的な古墳の築造を新しく許された新興勢力によって築かれたことが推測される。古墳群のあり方は、いわゆる群集墳とは異なり、7～8基からその倍の15～16基の単位で、独立した舌状台地全域に形成され、各支群が有力被葬者層とその下部構造によって構成される特徴をもつ。椎名崎古墳群では、中規模前方後円墳を有力被葬者層とする系統があり、それに有力円墳と小規模古墳を伴う構成が認められる。一方、生実古墳群では、有力円墳と小規模円墳主体の構成で、むしろ傍系的な様相を呈しているが、有力円墳群には中規模前方後円墳に匹敵する副葬品をもつものがあり、中期以来の伝統をもつ在地グループと解される。

第2点は、前述した鉄製武器を中心とした副葬品のあり方である。鉄製副葬品による被葬者群の編成秩序は、鉄製馬具・飾り大刀の有無、鉄製大刀の寡多、鉄製飾り弓金具の有無、鉄鏃の寡多に拠り、集団の性格としては装飾馬具を多くもつ騎兵を中心とした軍団とは異なり、鉄鏃と弓を中心とした歩兵軍団（靫負部等）の一例が考えられる。地理的には、東京湾沿岸を舟で移動することが容易に行われたと考えられる。

また、村田川流域全体の中での位置づけには、村田川南岸の菊間古墳群の後期の様相が問題になるが、前方後円墳のほとんどが未解明で、後期古墳は、集落跡調査に伴って小規模な帆立貝形前方後円墳1基と円墳6基が調査されているにすぎない。(註19) このうち「大厩遺跡」として調査された3基のうちの2基は、典型的な剣身形鉄鏃を主体とする鉄鏃の構成をもち、群全体の様相に興味がもたれるが、周辺部の大半は未調査である。菊間では、前期から有力古墳が築造され、中期には埴輪をもつ古墳が複数確認されており、後期の前方後円墳の解明は、「菊間国造」の勢力を知る重要な鍵であることは言うまでもない。この菊間国造の勢力圏については、現在の知見では推測の域を出ないが、前期から中期の様相は、石釧と鉄製農耕具出土古墳の分布によって、生実・椎名崎古墳群、草刈古墳群、菊間・大厩古墳群は不可分の関係にあることが窺える。また、中期の石枕、滑石製模造品副葬円墳の分布域として千葉市中央部を流れる都川流域を含めたより広い範囲での検討も必要である。一方、後期に関しては、生実・椎名崎古墳群の

資料だけが突出して、都川流域、村田川流域の他の資料が稀薄であるが、後期のこの時期に、都川流域、菊間の領域から半独立して開発された状況も窺える。前述した6世紀中葉以降の急速な開発は、この地域が下総・上総の要として直轄基地的に扱われていた可能性を示しているともいえよう。より上位者の様相はほとんど未解明でわずかに伝承資料[註20]を残すのみであるが、現在のところ周辺部の中で異彩をはなっていることは確かである。いずれにしても沖積地中央部の古墳群の急速な広がりと鉄製武器類の大量副葬の背景には、古墳時代後期の東国政策の断片が窺える。

ここで、当古墳群から直線距離にしてわずか2.5〜5.0kmの千葉市蘇我町に式内社である蘇賀比咩神社が所在していることに注目しておきたい。6世紀末葉〜7世紀代の蘇我氏と東国経営の深い関わりについては、既に先学諸氏によって指摘されているが、当地域がその一拠点として、下総北部への進行の前進基地的役割を担ったことが想定される[註21]。東京湾東岸の古代交通の要衝にある当地域に大和朝廷の下総進出の拠点基地が築かれ、やがて蘇我系（大王系）の龍角寺岩屋古墳を頂点とする広域支配権確立の基地の一つになったことは想像に難くない。

古墳時代後期に、中央政権の軍事的基盤が東国に移ったことは、特定の馬具や飾り大刀が東国に偏在することによっても推測されているが、生実・椎名崎古墳群の被葬者群は、常時戦闘や遠征に備える歩兵軍団として東国軍団の下部組織に組み入れられていたものと考えられる。

古代の東国において大規模な公的鍛冶工房が存在したことを明らかにした茨城県石岡市鹿の子C遺跡[註22]には、大がかりな工房群の中に鉄器の製作、補修部門が存在しており、鉄鏃・小札等の武器・武具類の製作、補修が行われたことが判明している。このような東北遠征基地的性格の工房が8〜9世紀の東国に確実に存在したことは、その前代における東国軍団の性格を暗示するものといえよう。

しかし、当古墳群の鉄器の製作を現地で行っていた可能性は薄い。当地域では、4〜5世紀の時期に南二重堀遺跡の住居跡、および草刈1号墳から、素材である鉄鋌（草刈1号墳例はミニチュア）が出土しているが、限定した出土例で周辺に関連資料もなく、特殊な事情から入手された畿内色の強い貴重品と考えられる。生実・椎名崎古墳群形成期の集落もかなり調査されているが、在地の鉄器生産を積極的に裏付ける証左はなく、現在確認の生産遺跡（製鉄跡、鍛冶跡）の知見[註23]では、平安時代にようやく本格的な鉄器の生産活動が始まったと考えるのが妥当である。集落跡出土の鉄器がにわかに増えるのもこの頃からである。

一方、市原市江子田金環塚古墳[註24]では、鍛冶具のひとつである鉄鉗が副葬されており、単独の出土例とはいえ在地の鍛冶（鉄素材搬入による小鍛冶）の集団が古墳時代後期の有力首長層に掌握されていた可能性がないとはいえない。

生実・椎名崎古墳群の鉄器については、中央の東国政策に関連して、特定の武器・武具類が

生産地から供給された可能性が強いが、鉄鏃に見られる古墳ごとのまとまりやバラエティには、被葬者群と密接に結びついた鍛冶集団の存在が想定できる。被葬者群が直接把握していた集団ではないと思われるが、中央の指揮によって当地域を含めた東国の武装集団のために経営された工房か、あるいはその委託を受けた在地の有力首長層によって経営された工房（鉄素材をもった移動集団？）に拠るものであることが予想される。やがて奈良・平安時代に至って鉄生産、鉄器生産が在地で広く行われるようになるが、これを掌握した有力者層が、当地域の奈良・平安時代の方墳群被葬者層であることは想像に難くない。既に後期古墳時代は終わり、地方勢力は律令制度上では大きく組み換えられてもなお、後期古墳を築いた系譜上に存続した勢力が根強く、このような方墳群の存在が、上総・下総地域で次第に明らかになりつつあることにも注目しておきたい。

以上に述べてきた東京湾東岸最大規模の後期古墳群は、100mクラスの前方後円墳と大型方墳の存在しない地域として多様な要素と地域色を抽出し得ると考えられる。周辺部の調査成果を含めた多角的な検討を期していきたい。

註

(1) ⓐ 池上 悟 「後期古墳時代集落出土鉄鏃に関する若干の問題」『東京考古』1 1982

ⓑ 小久保徹他 「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ」—鉄鏃について—『研究紀要』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983

ⓒ 小森哲也 「栃木県内古墳出土遺物考(1)—鉄鏃の変遷—」『栃木県考古学会誌』8 1984

(2) 終末期古墳の概念規定については，畿内の支配者層が，前方後円墳に替わって大型方墳，あるいは円墳を採用し，大陸文化の影響と政治秩序の変革を迎える6世紀末葉～7世紀後葉の畿内の古墳の変化を示す用語として用いられているが，東国の終末期には，地域色を加味した解釈が必要であり，当地域では，7世紀中葉前後に方墳を採用した後に方墳群の形成が活発に行われ，その下限は9世紀まで降る情況にある。奈良・平安時代の「方形周溝状遺構」として分離する考え方もあるが，一連の造墓活動と地域色を重視して，当地域の終末期古墳として扱うことにしたい。

(3) なお，鉄鏃の比較資料としては，周辺でまとまった調査の行われている市原市国分寺台古墳群の例を主に用いており，既発表資料，および筆者の分担した西谷古墳群出土資料を一部用いた。

(4) 小支谷に面した小支群の名称については，それぞれの報告書，および調査で用いた名称に従った。

(5) 狛江市史に発表された同市亀塚古墳出土の剣身形鉄鏃を初源に近いものと考え，東京国立博物館所蔵の亀塚古墳出土鉄鏃を実見したが，剣身形出現以前の別系統のものであった。公表された鉄鏃（国学院高校所蔵）の帰属には，なお十分な検討が必要と思われる。東博所蔵資料の実見には，本村豪章氏ならびに望月幹夫氏のお世話になった。

『狛江市史』 狛江市史編さん委員会，狛江市 1985

(6) 『城山第1号前方後円墳』 小見川町教育委員会 1978

(7) 重量については，報告された資料が少なく，銹化が著しいために正確な値が出ないものが多いので，計測値の資料は限られている。今回計測したのは，馬ノ口古墳群，神明社裏古墳群出土鉄鏃のみで，重量の変遷を見るにはより多くの値の平均値が必要であることは否めない。なお，傍証資料として市原市西谷古墳群の計測値を用いている。

(8) ⓐ『公津原』　千葉県企業庁　1975　ⓑ　杉山晋作　「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例—公津原古墳群とその近隣—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集　1981

(9) 『請西』　木更津市請西遺跡調査団　1977

(10) 『西原古墳群』　考古学資料刊行会　1976

(11) 『柏崎古墳群』　考古学資料刊行会　1968

(12) 『鹿島古墳群』　埼玉県教育委員会　1972

(13) 『上総山王山古墳』　上総山王山古墳発掘調査団　1980

(14) 『原1号墳発掘調査概報』千葉県教育委員会　1970

(15) 『白駒古墳』　君津市白駒遺跡発掘調査会　1981

(16) 『法皇塚古墳』　小林三郎・熊野正也編　1976

(17) 当地域の横穴式石室は，第1次調査以来，玄室の前面に続く部分を「羨道部」と捉えて報告しているが，玄室と同様柱状石による区画と天井石があり，追葬や遺物の供献が行われていることから，「前室」としての構造・機能をもつことが明らかである。そうすると，複室構造の横穴式石室と捉えなければならず，従来の「羨道部をもつ両袖・単室の横穴式石室」という認識を自己批判も含めて全面的に変える必要が生じる。今後，周辺部の横穴式石室を含めた系譜と構造の検討を行った上で再度取り上げることにしたい。

(18) 拙稿「古墳出土の鉄鏃について」『千葉東南部ニュータウン15』—馬ノ口遺跡他—　㈶千葉県文化財センター　1984

(19) ⓐ『市原市大厩遺跡』　房総考古資料刊行会　1974

ⓑ『市原市菊間遺跡』　㈶千葉県都市公社　1974

(20) 地元の古老によって，七廻塚古墳の所在する長山台地北辺の甘藷貯蔵穴採集品として打出し文のある金製刀装具，トンボ玉2点，ガラス玉21点が，㈶千葉市文化財センターに寄贈されている。氏の話に拠ると，往時生実町周辺には約30基の古墳が所在しており，上記の採集品は台地突端の古墳から出土した模様である。

(21) 安藤鴻基　「房総七世紀史の一姿相」『古代探叢』—滝口宏先生古稀記念考古学論集—　早稲田大学出版部　1980

(22) 『鹿の子C遺跡』遺構・遺物編　常盤自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5　茨城県教育財団　1983

(23) ⓐ「押沼大六天遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.9　㈶千葉県文化財センター　1983

ⓑ『潤井戸西山遺跡』　㈶市原市文化財センター　1986

村田川対岸の潤井戸西山遺跡では，古墳時代中期の住居跡から石製鉄床と小型鉄滓が検出されている。同時期の類例は，四街道市和良比中山遺跡にもあり，中山遺跡では筒形の羽口の他，器台脚部を転用した羽口も検出されている。潤井戸西山遺跡では，この他に住居廃絶後小鍛冶として利用されたと思われる遺構もあり，あくまでも推測の域を出ないが，当地域で最も古くさかのぼる鍛冶跡の可能性をもつ例で，この時期からごく小規模な鉄製品の製作や修理が行われていたことも予測できよう。

(24) 『上総　江子田金環塚古墳』　永沼律朗他　1985

主な参考文献・資料

(1) 末永雅雄　1981　『日本上代の武器』　木耳社
(2) 後藤守一　1939　「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号
(3) 小林謙一　1975　「弓矢と甲冑の変遷」『古代史発掘』6　講談社
(4) 田中新史　1976　「南向原古墳群の調査」(Ⅶまとめ，鉄鏃他)『南向原』上総国分寺台遺跡調査団
(5) 田中新史　1979　「古墳出土の飾り弓」―鈥飾りの弓の出現と展開―『伊知波良』1
(6) 田中新史　1981　「根田古墳群」『上総国分寺台発掘調査概報』　上総国分寺台遺跡調査団
(7) 田中新史　1985　「古墳時代終末期の地域色―東国の地下式系土坑墓を中心として―」『古代探叢』II　早稲田大学出版部
(8) 古墳文化研究会　1984　『日本古代文化研究』　創刊号
(9) 新納　泉　1983　「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号
(10) 田中晋作　1981　「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」『ヒストリア』第93号
(11) 野上丈助　1968　「古墳時代における鉄器および鉄生産の諸問題」『考古学研究』第15巻第2号
(12) 川西宏幸　1986　「後期畿内政権論」『考古学雑誌』第71巻第2号
(13) 和田晴吾　1986　「金属器の生産と流通」岩波講座『日本考古学』3生産と流通　岩波書店
(14) (財)千葉県都市公社　1975　『千葉東南部ニュータウン1』―椎名崎古墳群（第1次）―
(15) (財)千葉県都市公社　1975　『千葉東南部ニュータウン3』―有吉1次―
(16) (財)千葉県文化財センター　1977　『千葉東南部ニュータウン4』―生浜古墳群―
(17) (財)千葉県文化財センター　1979　『千葉東南部ニュータウン6』―椎名崎遺跡―
(18) (財)千葉県文化財センター　1979　『千葉東南部ニュータウン8』―ムコアラク遺跡・小金沢古墳群―
(19) (財)千葉県文化財センター　1982　『千葉東南部ニュータウン10』―小金沢貝塚―
(20) (財)千葉県文化財センター　1981　『千葉東南部ニュータウン11』―六通金山遺跡―
(21) (財)千葉県文化財センター　1983　『千葉東南部ニュータウン12』―南二重堀遺跡―
(22) (財)千葉県文化財センター　1982　『千葉東南部ニュータウン13』―上赤塚1号墳・狐塚古墳群 ―
(23) (財)千葉県文化財センター　1983　『千葉東南部ニュータウン14』―有吉遺跡（第3次）他―
(24) (財)千葉県文化財センター　1984　『千葉東南部ニュータウン15』―馬ノ口遺跡他―
(25) (財)千葉県文化財センター　1985　『千葉東南部ニュータウン16』―大膳野北遺跡―
(26) (財)千葉県文化財センター　1982　『千葉市大膳野北遺跡』
(27) (財)千葉県文化財センター　1980　『千原台ニュータウン』1―野馬堀遺跡他―
(28) (財)千葉県文化財センター　1983　『千原台ニュータウン』II―草刈遺跡A区（第1次調査）・鶴牧古墳群・人形塚―

（千葉県文化財センター調査部）